
迷い道

なんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷い道

【Nコード】

N4897B

【作者名】

なんじ

【あらすじ】

白鳥家での納涼ガーデンパーティーに遅れた高木は既にパーティー会場に着いているはずの佐藤と途中で出会う。そこは有名な自殺の名所だった。

高木は急いでいた。

今日は、白鳥の自宅の庭で、一課の人間達が集まって納涼ガーデンパーティーを開く事になっていた。

しかし、高木は仕事のケリがつかないため、退庁するのがずいぶん遅れてしまった。

高木は、分かれ道の前で、ふと立ち止まった。

右に行けば近道である。

しかし、そちらを行けば、有名な自殺の名所である蓮華米花寺を通らなければならない。

臨場感豊かに、由美の語るところによれば、

自殺が続くようになったのは、5年ほど前から。

寺一番の古木で、一人の女性が縊死したのが始めだった。

それから、毎年何人もの人が、

これといった理由もなしに、そこで死を選んだ。

もちろん、近くの交番も、パトロールを強化したが、

それでも、自殺を防げなかった。

その上、一人でそこを巡回していた、警官まで自殺してしまった。

彼は、交番に配属されたばかりの新人警察官で

自殺する理由はまったくわからなかった。

事、ここにいたって、寺側では、その木を切る決意をした。

しかし、切ろうとすると、必ず何らかの事故が起こり、

結局、木はそのままになった。

以後、そこをパトロールする時は、必ず二人で、
という申し合わせができ、今に到っていた。

高木は、自殺する気はさらさら無かった。
それに遅刻をしたら、白鳥に嫌味を言われるのは、確実だった。
高木は、右の道を歩き出した。

高木は、足早に歩いた。

ほどなく件の寺についた。

うわさの木は月明かりの中、ぼんやり浮かんで見える。

その下に、見覚えのある人影があった。

「佐藤さんじゃないですか。

由美さんと一緒にやあなかつたんですか」

佐藤の浴衣は紺地に、白い色の蝶の模様がついている。

まるで本物の白い蝶が佐藤にまわりついていてるかのようだった。

そのせいか、いつもと雰囲気まで違って見える。

「こんばんわ、高木君」

声は、いつもと変わらない。

しかし表情にはどことなく翳りがあった。

ひっそりと佇む佐藤を見ると胸の鼓動が早くなった。

高木は自分の心臓の音が佐藤に聞こえるような気がして慌てた。

「ああ、浴衣に着替えてて、遅くなっちゃたんですね。

さあ、急ぎましょう。

みんな、待ってますよ」

高木は、上ずりそうな声を抑えた。

” 佐藤さんと、二人つきり？！ ”

「別に、急がなくてもいいわ。

私達がいなくても、何も変わりはない」

佐藤は、すべるように、高木の側に寄った。

高木は、寄り添う佐藤に、どきまぎしながら言った。

「まあ、僕がいなくても、みんな、いいでしょうけど、

佐藤さんは絶対いなくちゃあ」

「そうかしら、私がいなくなったら、みんな私の事はすぐ忘れてしまうでしょうね」

佐藤らしくないセリフに、高木は不安になった。

「どうしたんですか？佐藤さん」

佐藤は夜空を見上げた。

「高木君は、空しくならない？」

いくら事件を解決しても、決して事件はなくなならない。犯人を逮捕しても、死んだ人は、決して戻ってこない。私達のやってることは無駄な事じゃない？

なんだか、賽の河原で石を積み上げているみたい。

高木君もそう思うでしょう？」

高木は一瞬返す言葉を失った。

佐藤は微笑んで、高木の目を見つめた。

美しい、魂まで吸い込まれそうな、ぬばたまの闇の瞳だった。

”変だ？何かおかしい！目をそらせ、俺！”

しかし、その瞳から目が離せない。

佐藤の手が、高木のネクタイを緩めるのを感じる。

「さ、佐藤さん、何するんですか」

”動け、俺の体”

「ね、高木君、そのネクタイで私の首を・・・、そしてあなたも・・・

氷のように冷たい手が自分の手を持ち上げネクタイを触らせる。

高木は自分の覗き込む闇が一層深くなったのを感じた。

少しずつ気が遠くなっていくような気がする。

佐藤の声だけが、頭の中に聞こえる。

「ね・・・さあ」

”ダメだ！！！”

自分が本当にそう叫んだのか、心の中でそう言ったのかは分からなかった。

しかし高らかに、響き渡った平手打ちの音は本物だった。

闇が消えた。

高木は、頬を押さえて地面に座り込んだ佐藤を、側の石の上に座らせた。

そして、自分の頭を二度三度振った。

さっきまでのあれは何だったのだろうか？

自分はどうかしてしまったのか。

そう思ったが、それよりも、心配なのは佐藤のほうである。

「すみません、あんまりいつもの佐藤さんらしくなかったんで、いい」

佐藤はうつむいたまま答えない。

高木は佐藤の側の地面に腰を下ろした。

「そりゃ、佐藤さんの、言った事、

僕だっと思ってないわけじゃありません。

というか、この仕事をしてる人間は、誰だって、

そう思ってるんじゃないかと思います。

でも、事件が起こると、

必死になっ解決しようとしてしまうんですよ。

佐藤さんだっ、今、携帯で、事件だってきけば

すっ飛んでいくと思いますよ」

「そうかしら」

高木は佐藤に笑いかけた。

「そうですよ。

それに、僕は思っんです。

死んでしまった人を、生き返らす事は、できません

でも、真実を明らかにしない限り、

残された人は、過去に囚われたままなんじゃないかって。

真実は、時には、残酷です。

それでも、明日のために、

真実を知らなくてはいけないんじゃないかって。

僕らはきつとその新しい明日のためにに仕事をしているんですよ」

高木は、自分のセリフが余りに、

格好をつけすぎているような気がして、顔を赤くした。

「あ、格好つけすぎですよね」

佐藤は高木の顔を見つめた。

「そんなにがんばったところで、

高木君が、死んでしまったら、

みんなあなたの事はすぐ忘れてしまうわ。

みんな、自分の事で、精一杯ですもの」

「いいんですよ、それで」

佐藤は、驚いたように、瞳を見開いた。

「まあ、もちろん覚えておいて欲しいのは欲しいですけどね。

でも、皆が忘れてしまっても、僕は、皆の事を忘れない、忘れたくないです。」

もちろん、死んだあとの事は、分からないんですけどね」

佐藤は黙ってうつむいた。

その姿は今にも消えてしまいそうに、弱々しく見えた。

「ねえ、佐藤さん。疲れてるんでしょう？」

夏ばてですよ、きつと。

体が弱つてると、やたら妙な事を考えてしまうもんですよ。

そうだ、元太君から、とつときのうな重のお店聞いたんです。

本当に、美味しくて、その上安いですよ。

今度、その・・・いつしよに・・・食べに行きませんか」

顔を赤らめ、頭をやたら掻きながら言う、

高木を見て佐藤は声をあげて笑った。

その、様子を見て高木も安心して笑った。

突然、佐藤が立ち上がった。

「高木君、ありがとう。あなたに会えてよかった。

私は、先に行くわ。あなたは後から、ゆっくり来てね。ゆっくりとね」

そういうと、佐藤は、足早に歩き出した。

慌てて、後を追おうとした高木は、道に落ちていた縄に足を捕られて、しりもちをついた。

苦勞して、縄を外し、顔をあげた時には、すでに佐藤の姿は無かった。

高木は、佐藤に追いつこうと、走りに走って、白鳥の家に着いた。庭ではすでにガーデンパーティーが始まっていた。

手を膝について、体を二つに折って息を整える。

「遅かったですね。まったく、ネクタイ緩めて、だらしないかつこうして」

白鳥の声だ。

「御仕事、お疲れ様。大丈夫よ、今始まったばかりなんだから」

佐藤の声に高木は顔をあげた。

紺地に、桔梗模様の浴衣を着ている。

「さ、佐藤さん・・その浴衣、桔梗の模様・・ですよね」

佐藤は、不思議そうに答えた。

「ええ、桔梗よ」

「まったく、高木君は、桔梗も知らないんですか？」

白鳥の皮肉めいた言葉は、高木の耳に入らなかった。

「浴衣、いつ着替えたんですか？」

「もちろん、仕事終わってすぐよ」

「じゃなくて、ここに来てから、もう一度・・？」

いえ、それ、今日2枚目の浴衣・・ですよね??ね??」

「高木君、披露宴じゃあるまいし、御色直しはしないわよ」

笑顔で佐藤は答えた。

「高木君?なんだか、顔色悪いわよ?急ぎすぎて、気分悪くなったの?」

黙ってしまった、高木に佐藤は心配そうに話し掛けた。

「高木君、こんなにきれいに装った佐藤さんを前に、幽霊でも見た

ような顔をして。

失礼ですよ」

なおも言葉を続けようとする白鳥を手で制して、佐藤は言った。

「何か、飲み物持ってきてあげる。

少し休んでから、ゆっくりパーティー楽しみましょうね」

高木は、ただただ、空を見つめるばかりであった。

その日以後、蓮華米花寺で、自ら命を絶つものはいなくなった。

（後書き）

2002年某サイトに置かせていただいた作品です。

原題は「米花町の亡霊」

そのサイト様のTOP絵が佐藤刑事の浴衣姿でして
それを見て思いついたのがこのお話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4897b/>

迷い道

2010年10月31日04時52分発行